



本邦初の ほうろう 珐瑯看板を手がけた 石橋(岡本)瀧雄さん



石橋(岡本)瀧雄さん

大正8年12月撮影。このころは岡本姓を名乗っていた。(井手修家所蔵)

ひと昔前、町のあちこちで見かけたたばこや飲料水、レトルトカレーなど広告用の珐瑯看板を覚えていらっしゃいますか？ 珐瑯看板とは主に屋外用の表示として使用される看板の一種で、光沢のある塗装ないし印刷で仕上げられた金属性のものです。



現在は紙媒体やテレビ・ラジオ、さらにはネット環境が整ってきたためにレトロな広告、看板となっていますが、この珐瑯看板を最初に手がけたといわれる人が有田の人であったことをご存知でしょうか？

実は、有田の窯業教育の歴史を調べている中で、明治期の男子は有田徒弟学校や有田工業学校などがあり十分な教育環境だったようですが、いずれも女兒には門戸が開かれていませんでした。しかしながら、有田焼製作の過程で女性の果たす役割は江戸時代から重要であったことは、有田陶磁美術館蔵の「染付有田皿山職人尽し絵図大皿」を見ても明らかです。

そこで明治39年(1906)に設立されたのが女兒陶画練習所でした。このことは『肥前陶磁史考』に「婦人協会を組織し、先に学生養成会を主張せし片淵文逸の提案に基づき、会務として女兒の画工練習所(本幸平田代安吉方)を設立」とあります。さらにその教師が明治37年(1904)4月、有田工業学校(分校時代)の第1回陶画科卒業生で、後年イタリアに留学し「我邦にて始めて珐瑯看板を製す、後岡本姓に改め東京市会議員」でもあった石橋瀧雄であったとありま

す。今まで何度かこの女兒陶画練習所のことは目にしていたものの、教師であった石橋瀧雄については思いが深く至りませんでした。

そのような中、町内大樽の旧家・井手家から資料や古写真等を提供いただき調べる中で、大正3年(1914)の資料や古写真に石橋瀧雄の写真がありました。そこで、東京都公文書館の馬場宏恵さんに「東京市会に石橋あるいは岡本瀧雄という議員が存在していたか」をお尋ねしましたところ、大正15年(1926)から昭和3年(1928)まで本所区向島押上町231番地に岡本瀧雄という市会議員がいて珐瑯製造業を営んでいたことがわかりました。

また、有田工業高等学校の歴史に詳しい金岩昭夫元教諭にお尋ねした所、大正4年(1915)の「大日本窯業協会雑誌 3月号」に新入会員の一人として三重県桑名町の珐瑯鉄器株式会社主任石橋瀧雄の名があることをご教示いただきました。

さらに井手家には大正3年ごろ中国への旅の前夜、伊太利皇帝より与えられた勲五等王冠章を胸にした写真があり、イタリア留学はこのころの事と思われます。

珐瑯の製造方法は、釉薬を使って金属に文様を描き、窯で焼成することが焼物製造方法と共通しており、恐らく、江副孫右衛門と同級生でもあり有田工業学校時代に培った能力が生かされたものと思われます。

まだまだ謎に包まれた岡本珐瑯あるいは石橋(岡本)瀧雄という人物ですが、いずれにしてもこの有田が育んだ稀代の人物の一人であったといえるのではないのでしょうか。 [文中敬称略] (尾崎 葉子)

・参考文献

「懐かしのホーロー看板」佐溝力著

「日本ホーロー看板広告大図録」佐溝力・平松弘孝編

皿 季刊 山

No.117

春
2018

幕末・維新に活躍した 有田の先人たち 其五

禁裏御用の名窯・辻精磁社

十一代 辻 勝藏

(弘化4年12月6日～昭和4年3月20日)



辻 勝藏さん
(写真は辻家提供)

江戸時代から続く窯元の一つ、辻精磁社・辻家の当主であった辻勝藏は幕末から昭和にかけて、香蘭社や精磁会社の一員として、あるいは窯元の当主として、また有田町長としても活躍しました(文中敬称略)。

辻勝藏は江戸時代から続く名窯の長男として上幸平に生まれ、明治4年(1871)に亡き父十代辻喜平次の後を継ぎました。

辻家は三代目辻喜右衛門の時代に禁裏(当時の宮中)御用の生産が始まりました。安永3年(1774)、六代辻喜平次の時、常陸大掾源朝臣愛常の官名を授けられ、禁裏へ直接納めるように求められました。

時代は明治へと移り、明治8年(1875)、八代深川栄左衛門、手塚龜之助、深海墨之助らと共に合本組織香蘭社を創立しました。ちなみに八代深川栄左衛門の妻セイは辻家から嫁いだ勝藏の姉であり、つまり八代栄左衛門とは義理の兄弟という間柄でした。

翌9年(1876)に開催された米国フィラデルフィア万国博覧会には、この時の香蘭社の製品などが出品されています。中でも辻家の「切透耳無花生、染錦菊ギリ極地紋画」という高さ2尺5寸(約75cm)1対は同年10月6日に500ドルで売れました。高台内には蘭のマークと「肥前辻製」の銘が金書きされています。他にも切り透かしのコーヒーセットは現在、イギリスのビクトリア&アルバート美術館に収蔵されていますが、この万博に辻家は34件の製品を出品し、辻勝藏は「陶造絶妙ナリ、難製ノ痕跡ヲ見サズ形状良好、日本固有ノ裝飾ヲ著ス、温雅ニシテ成效アリ」という

ことで賞牌賞状を授与されました。

しかしながら明治12年(1879)には経営方針の違いから八代栄左衛門一人が香蘭社を経営し、竹馬の友でもあった他のメンバーは新たに精磁会社を設立しました。翌13年7月には宮内省から48人分のディナーセット2セットの見積もり依頼がありました。それぞれ金彩桐御紋食器と染付古鏡模様食器で、見積もり代金は前者が7264円、後者は4528円という金額でした。これに先んじて同年5月にも注文があり、染付の蓋物や丼などそれぞれ30個ずつ、計150個の注文がありました。ただ、以前の製品には寸法が注文どおりでなかったということで、「必ず右之寸法違等無之様幾重ニモ御注意」して製造に取り組みました。

この折、辻は住宅を立ち退いて精磁会社の本社の製造所とし、深海も自分の製造所を廃してこれに合併したことが『精磁会社傳記』に記されています。

その後、川原忠次郎も加わり(館報No.116参照)、また差金人(利益を共通することを望む者)として久米邦武、松尾儀助、百田恒右衛門らを揃えた精磁会社ではありましたが、輸出の停滞、在庫品の増加、主要な社員であった川原、深海墨之助らの相次ぐ死去などで明治20年代半ばに会社は存続不可能になっていたようです。

このころ辻は「挽回容易ならざるを悟り」退社を申し出ました。久米や松尾らの仲裁も功を奏さず、無条件で退社を許可されたと手塚栄四郎の『自叙傳』にあり、明治22年(1889)7月10日付けで退社。その後、完巧社を興し、明治36年(1903)に資本金5万円の辻合資会社を組織しました。同39年(1906)には農商務大臣松岡康毅より多年にわたる功績に対し、賞状と金子が下賜されました。

会社経営の傍ら、同42年(1909)6月には有田町長に就任。大正2年(1913)まで久富三保助^{ひさとみほすけ}助役と共に町政に尽力しました。現在、彼は上幸平三空庵の墓地に歴代の先祖と共に眠っています。

【参考資料】

- 「ふでばこ 33号 特集万国博覧会」
- 「肥前陶磁史考」 中島浩氣著
- 「自叙傳」 手塚栄四郎著
- 「明治9年フィラデルフィア万国博覧会出品目録」香蘭社蔵
- 「九州實業大家名鑑」 西村修一郎著
- 「天皇のダイニングホール～知られざる明治天皇の宮廷外交」メアリー・レッドファーン著他
- 「米國博覧会報告書 全5冊」 米國博覧会事務局
- 「米國費拉地費府博覧會出品陶器目録」 館蔵
- 「宮内省御注文」 館蔵
- 「精磁会社傳記」 館蔵
- 「精磁会社社員退社届」 館蔵等

唐船城築城800年記念 学習会を開催しました

この学習会は、記念すべき唐船城築城800年の節目を迎えるにあたって、昨年の12月17日(日)に有田町西公民館において、町民の方々などを対象に唐船城の周知を図るため企画しました。講師としてお迎えしたのは、町内在住で、西有田郷土史研究会会長を長く務め、著書も多く、有田町史や西有田町史も執筆された、郷土史研究家の池田徳馬先生です。



学習会では、有田氏の源流は嵯峨天皇で、その子の源融というのが平安時代の人で、この人物が光源氏のモデルであったこと、その子孫で源久が松浦近辺を拝領し、そして有田氏の始祖となる栄がいるという有田氏の事、ご自身の池田家も有田氏に仕えてきた一族であったというルーツの事、そして唐船城にあるという埋蔵金伝説についてお話しされました。当日は、町内外から100名を超える方々にご来場いただき、周知を図るという目的を達することができたと思います。

(伊達惇一郎)



唐船城築城800年記念事業 記念講演会のお知らせ

唐船城は、はじめて有田一帯を包括的に治めた有田氏の居城で、築城から今年で800年を迎えます。記念すべき節目の年を迎えるにあたり、3月24日(土)の13時30分より、歴史と文化の森公園焔の博記念堂の文化ホールにおいて記念講演会を開催します。講師には中近世の城郭考古学研究の第一人者で、NHK大河ドラマ『真田丸』では、城郭考証を担われ、様々なメディアでもご活躍されている奈良大学の千田嘉博教授をお迎えします。演題は「中世城郭と唐船城」です。知らなかった中世のお城の事や、我々の身近にあった築城から800年を迎える唐船城についてお話ししていただきますので、是非多くの方のご来場をお待ちしております。なお、入場は無料です。

また、当日は記念事業で使用されるロゴマークの発表も行います。



千田 嘉博氏 (撮影：皇中和久)





町屋で昔話を聞く会 開催しました

平成30年1月27日(土)、毎年恒例の表記の会を有田町公民館と共催で開催しました。会場は佐賀県重要文化財「有田異人館」の附属施設として昨年度建てられた蔵で、話者は1回目から担当していただいている「ひこうせん」の皆さまに今回もお願いしました。

当日はインフルエンザに罹患した子どもたちも多く、参加者は16人でした。庭の手水鉢の水も凍るほどの寒さでしたが、興味深そうに聞き入っていました。

お話のあと、異人館のことや今から150年ほど前に西洋人が有田に来たことなどを話し、また、周辺にある伝統的な町屋には指定物件の印として陶板が掲示されているので、それも探してもらいました。



第64回文化財防火デーを 実施しました

昭和24年1月26日に、修復中の奈良・法隆寺金堂から出火した火災によって、金堂内の壁画の大半が焼失してしまいました。世界的な文化遺産が被災したことで、この日を「文化財防火デー」と定め、全国的な防火運動が展開されています。

有田町においても、1月28日(日)に、築城800年の節目の年を迎えた唐船城(山田神社)において火災消火等の訓練を実施しました。

今回は、唐船城跡の山林において火災が発生したという想定での訓練となりました。発見者による通報訓練を行い、その後消防署員や地元消防団による放水消火訓練、町民参加の消火器取り扱い訓練など、火災等



の発生に欠かせない訓練を体験しました。

災害が起こらないことが何よりなのですが、万が一発生した場合でも、冷静に対処できるように、シミュレーションをしておくこと、また、大切な文化財を次の世代へ伝えていくための訓練でもあります。



伊能大図パネル展が 開催されます

江戸時代に全国をくまなく測量し日本地図(正式には大日本沿海輿地全図)を作った伊能忠敬が亡くなって、今年で200年になります。そこで、来る3月9日(金)～10日(土)にかけて「伊能大図パネル展」が、有田町教育委員会・有田町公民館主催で開催されます(詳細は下記のとおり)。

これは原図と同じスケールの複製パネルで九州から中国・四国にかけての一部分ではありますが、長さ1m、幅2mのものが約60枚で、相当広いスペースがなければ一度に広げることができません。今回、伊能の出身地である千葉県香取市と友好関係にある佐賀県鹿島市(鹿島藩初代藩主鍋島忠茂公ゆかりの地であることから平成28年に友好都市協定を締結)が、3月末まで香取市所有のパネルを保管中ということで、両市のご協力のもとお借りできることになりました。

2日間の開催ですが、伊能測量隊がたどった当時の有田をご覧ください。

• 日 時	平成30年 3月9日(金)・10日(土)
• 展示時間	午前9時～午後4時
• 展示説明	①10:00～ ②13:30～
• 講 師	伊能忠敬研究会会員 馬場 良平氏
• 場 所	焱の博記念堂 コンベンションホール
• 入 場 料	無料
• 準備するもの	靴下 (パネルの上を歩くため) ※裸足・タイツ・ストッキング不可

季 刊 『皿 山』

通巻 117号 (平成30年3月1日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山一丁目4-1

☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185

URL: <http://www.town.arita.lg.jp/main/169.html>